

研 究 者 か ら の メ ッ セ ー ジ

研 究

— けんきゅうびより —

日 和

Vol.
04

研究は楽しい。		P.02		<u>Case #01</u> 自分と相手の両方を尊重する 異文化間コミュニケーションを 研究・実践する 堀江 未来 国際教育推進機構 教授 立命館小学校・中学校・高等学校 代表校長
膨大な文献をひも解き、数えきれないほど実験を繰り返す。		P.04		<u>Case #02</u> 異文化に触れた経験を糧に 異国の言語・文化を研究する カンダボダ パラバート ブッティカ 国際教育推進機構 准教授
それまでわからなかったことを解き明かす感動、		P.06		<u>Case #03</u> フィールドに赴き、地域と関り 持続可能な地域づくりを考える 小沢 道紀 食マネジメント学部 准教授
そしてその先に、世界を変える、未来をつくる喜びがある。		P.08		<u>Case #04</u> 映画・ドラマの現場で経験した すべてが脚本家としての 今に生きている 谷 慶子 映像学部 准教授
ここにあるのは、		P.10		<u>Case #05</u> 「当たり前」に疑問を持つ それが研究の出発点 菊盛 真衣 経営学部 准教授
「なぜ?」「好き」をとことん追究する、		P.12	活動紹介	
そんなワクワクすることを一生の仕事にした先輩たちの物語。		ごあいさつ		
その一つひとつが、あなたの未来を照らす道しるべになることを願って		松原 洋子 副総長・副学長／研究・学術情報・国際連携・ダイバーシティ&インクルージョン担当		
輝き続ける研究者たちの言葉を贈ります。		篠田 博之 情報理工学部 教授／リサーチライフサポート室 新室長		

研究日報 Vol.04 | 01

大学時代の中国留学が 国際教育研究の原点

初めて国際交流を体験したのは、大学時代。友人に誘われて大学祭実行委員になり、留学生と交流する企画を担当した時でした。1980年代後半当時、使命感を持って学んでいる多くの留学生と接し、異なる文化や言語を持つ人と触れ合う楽しさを知りました。その後、学内で留学生の生活をサポートしながら学内の国際交流を促進するサークルを立ち上げ、その活動に熱中しました。

中国語の先生から中国の南京大学への留学を勧められたのは、そんな時です。話を聞いた瞬間に「行きたいです」と即答しました。その時、留学を後押ししてくれた祖父の「20年後にはきっと中国は世界で重要な国になるだろうから、しっかり見てきなさい」という言葉が忘れられません。「今あるものだけで世界を判断せず、先を見据えてどう行動するかを考える」。その教えは、30年近く経った今も私の指針になっています。

中国での留学生活は、何もかもが日本とは異なり、刺激的なことばかり。毎日が楽しく、夢中で過ごした1年間で、異文化間コミュニケーションや国際教育を研究する原点となりました。心に残っているのは、親しくなった現地の学生から日本の戦争責任について問わ



れたことです。それに応える中で、相手の考えを理解しながら自分自身の考えをしっかりと伝える大切さを学ぶとともに、そうした対話が信頼関係を深めることも実感しました。

既存の価値観に捉われず 情熱を持って探究してほしい

研究に足を踏み入れたのは、留学から帰った後です。海外で学んで視野を大きく広げるとともに、自分の考えを言葉にする力を身につけて戻った時、日本に再適応できなかったのがきっかけ。その経験から、異文化を経験することの教育的な意味について考えるようになり、それを学問的に追究したいという気持ちが膨らみました。目指したのは、研究者というより実践者。将来、研究したことを生かし、若者が異文化に触れて成長できる場づくりに貢献したいと思い、大学院へ進学しました。

日本で修士課程を修了した後、アメリカのミネソタ大学の博士課程へ進学。博士論文では、日本における国際教育の礎を築いてこられた先輩の研究者や教育者にインタビューし、その成果を検証しました。グローバル化の進展した現在、国際教育は国を挙げて取り組むべき重要課題として認知されていますが、当時はほとんど重視されていませんでした。その中で先達の方々が努力を重ねた中に理念や理想や工夫があり、その積み重ねによって今日の教育実践が成り立っているということを研究を通じて再認識しました。

研究者を志す若い人たちにいつも伝えているのは、「新しいものが理解されるには時間がかかる」ということ。だから今ある価値観や既存の枠組みに捉われず、情熱の赴くままに

自分の関心を探究してほしい。それが、いつか新しい学問分野の創造にもつながっていきます。その一方で、独りよがりにならないように、相手に理解される言葉で伝える「コミュニケーション力」も磨いてほしいと思っています。

人材育成という新たな目標に 楽しみながら挑戦

立命館大学に赴任後は、研究だけでなく、異文化環境で問題解決能力を高める教育にも携わってきました。その一つとして、日本と台湾、韓国の学生を対象に、1週間ごとに3カ国で学ぶプロジェクト型海外プログラム、Asian Community Leadership Seminarの企画・運営をしています。最初はお互いにぎこちなかった学生たちが次第に信頼関係を構築し、安全・安心な学びの場でさまざまな議題を率直に語り合い、謙虚に学びあうようになります。プログラムを通じて異文化コミュニケーション力を高め、成長していく学生の姿を見るのが喜びです。

2014年には学外研究制度を利用して1年間、イタリア、アメリカ、台湾の大学に赴き、研究に集中する時間も設けました。さまざまな調査を行い、いくつもの論文を執筆して研究のおもしろさを再認識。研究者としても生き返ったような気持ちで帰国しました。

そして2017年からは立命館小学校・中学校・高等学校の代表校長を務めています。ますますグローバル化が進む今後、多様性を受容しながら自分自身も多様性の一部であることを認識し、自分と他者の両方を尊重できる。そんな器をもち、それぞれの分野で社会に貢献できる人を育てることを目標に、楽しみながら新たな挑戦に取り組んでいます。

Profile

名古屋大学教育学部を卒業後、同大学修士課程を修了。アメリカ・ミネソタ大学教育政策行政専攻（国際教育）にて博士号取得。1998年以降、名古屋大学、南山大学等を経て、2009年に立命館大学に赴任。2014年、サクロ・クオーレ・カトリック大学（イタリア）高等教育国際化研究センター客員研究員などを歴任し、2017年、立命館小学校・中学校・高等学校代表校長に就任。

Case #01

自分と相手の 両方を尊重する 異文化間 コミュニケーションを 研究・実践する

堀江 未来

国際教育推進機構 教授
立命館小学校・中学校・高等学校 代表校長

異文化に触れた 経験を糧に 異国の言語・ 文化を研究する

カンダボダ パラバート
ブツディカ

国際教育推進機構 准教授



Profile

高校卒業後、スリランカから来日。立命館アジア太平洋大学を卒業後、名古屋大学の修士課程・博士課程を修了。2009年、愛知東邦大学非常勤講師、2013年、名古屋大学非常勤講師を経て、2013年、嘱託講師として立命館大学に赴任。2018年より現職。



「世界を冒険したい」 そんな夢を抱いて来日

小さい頃から活発で冒険が大好きだった私は、「いずれは父親と同じ軍人になり、世界のさまざまな国へ行って冒険したい」と思っていました。そんな夢への第一歩として日本を選んだのは、ほんの小さな偶然から。母国・スリランカの高校を卒業し、大学に進学するまでの期間に、好奇心から立命館アジア太平洋大学（APU）の進学説明会に参加したのがきっかけでした。自動車をはじめ数多くの日本製品が流通し、日本のテレビドラマが放映されるなど、スリランカで日本は身近な外国の一つです。私自身、高校で日本語を勉強したこともあり、遠く離れた日本に行くことに抵抗はありませんでした。

幸運にもAPUに合格。世界中から学生が集まる国際的な環境で学び始めて最も苦労したのは、日本語よりも英語の習得でした。授業はもちろん、国際学生とのコミュニケーションはすべて英語。母国である程度英語を習得してきたものの、最初はほとんど聞き取ることができませんでした。周囲の学生は、私と同じスリランカ出身の学生も含めて皆、言語だけでなく学びの面でも優秀で、それまで自分がいかに小さな世界で生きてきたのかを痛感したのを覚えています。それから学びに対する意識が大きく変わりました。

もう一つの外国語である日本語は、学ぶというより実践を通じて身につけました。中でも力になったのが、アルバイトです。来日した年の冬休みに、農家で「七草摘み」のアルバイトをしたのを皮切りに、レストランやファストフード店、居酒屋、英会話教室や自治体など

でさまざまなアルバイトを経験。大学の枠を超え、社会のさまざまな人と接する中で日本語が上達していきました。

定説にない現象を捉えるのが 言語研究の醍醐味

「軍人になりたいなら、博士号を取りなさい」。母国にいた時に進路について家族と話した際、そう母親に言われたこともあり、当初から大学院への進学は考えていました。けれど博士号を取得するまでにどのくらいの期間と研究が必要か、きちんと把握したのはAPUに来てからです。「これは長い道のりになるな」と覚悟を決めたのは、3回生の時でした。

学びの中で関心を深めたのが、「言語」と「文化」です。卒業研究では、スリランカとオーストラリアを対象に、発展途上の国と先進国における日本語教育の現状を比較検証しました。それ以来、一貫して文化や言語習得と運用について研究しています。

修士課程では、日本語と英語を外国語として習得したシンハラ語母語話者の複数言語（シンハラ語、英語、日本語）での会話におけるコミュニケーションストラテジーについて言語混合（language mixing）と言語切り替え（language switching）を中心に検証しました。さらに博士課程では心理言語学の領域にも関心を広げ、人はどのような情報をもとに文章や語彙を「聞く」「読む」「書く」「話す」といった言語処理を行っているのか、実験を通して明らかにしようと試みました。博士論文では、シンハラ語の語順と文処理に必要な情報について実証的な調査を行った現在はスリランカの公用語のひとつであるシンハラ

語の母語話者や第二言語として英語を習得しようとしている日本語母語話者を対象に、実験を用いて言語処理を研究しています。

これまで誰も明らかにしていない現象を探究するのが、言語研究のおもしろいところ。定説とされている理論とは異なる結果を実験によって導き出し、「なぜなのか」を解き明かすのが研究の醍醐味です。

異文化に触れ世界が広がる 経験を学生にも

来日して約18年、今ではスリランカに戻った時に「逆カルチャーショック」を感じるほど日本の生活に馴染んでいます。最初は、あまりの環境の違いに帰りがたくて仕方がありませんでした。それが変わったのは、APUで異文化理解について学んでからです。いつも「自分の国とは違う」と思っていたのですが、授業を受け、「日本が『違う』のではなく、『違う自分』が日本に来たんだ」と発想を転換したこと、世界の見え方が一気に変わりました。

生まれ育った場所とは異なる国に行くと、新しいこと、経験したことのないものにたくさん出会います。それを前向きな気持ちで楽しむことで世界が広がり、研究者としても独自に視点を養うことができました。

現在は、研究や教育だけでなく、学生の異文化交流のサポートにも取り組んでいます。私自身の経験を生かし、これからグローバルに活躍する学生を育てることに役立ちたいと思っています。

自分で考え、探究する 大学で知った学びの楽しさ

高校までは暗記中心の勉強が好きになれず、自ら研究する道へ進むとは考えてもみませんでした。経営学部を選んだのは、大学進学を目指して浪人中、スーパーマーケットでアルバイトを経験してモノを売るおもしろさを実感し、経営に関心を持ったから。大学に入学し、自分で考え、探究していく学びのおもしろさを初めて実感しました。

私が大学時代を過ごしたのは、バブル経済が崩壊して数年後。社会でデフレが進む中で「どうしたらビジネスがうまくいくのか」を考えながら、主に流通を学びました。そして、サービス産業の経営課題やマーケティングについてより深く知りたいと思い、大学院に進学。当時、大学院には同世代の学生だけでなく社会人学生も学んでおり、年齢や経歴の異なる人と議論し、たくさんの刺激を受けたことを覚えています。

Case #03

フィールドに赴き、 地域と関り持続可能な 地域づくりを考える

小沢 道紀 食マネジメント学部 准教授



修士課程でサービス産業を取り巻く経営課題を大きなテーマとして研究する中で、ホスピタリティ産業にも関心が広がり、観光資源などの販売についても研究するようになりました。それが現在取り組む持続的な地域づくりについての研究や取り組みにつながっています。

フィールドを重視し 地域活性化に取り組む

研究にあたって一貫して重視してきたのは、机上の研究に留まらず、フィールドに赴き、実社会の課題に触れてそれを解決する具体策を考え、実践すること。実際に自治体や企業から経営課題を聞き、協働で解決に取り組むことも少なくありません。立命館大学スポーツ健康科学部に赴任した当時、Jリーグのチームの一つと協働で女性ファンが増加した原因を調査。検証結果がメディアに取り上げられたりもして、研究を実社会に役立てる意義とやりがいを実感しました。

少子高齢化が進展し、全国各地に過疎地域が増える中、現在は、熊本県や草津市、甲賀市

など地方自治体から依頼を受け、住民や地元企業と一緒に地域を元気づけることに取り組んでいます。こうした実社会の課題に対し、実効性の可能性の高い解決策を導き出すためには、一つの分野の専門知識だけでは不十分です。高い専門性を持ちつつも、多様な学術分野についての素養、多角的な視点で捉える力、立場や考え方の異なる人をつなげる力が求められると感じています。

2018（平成30）年、本学に新設された食マネジメント学部の設置に関わるようになってから改めて、地域に活力をもたらすコンテンツの一つとして「食」の価値にも注目するようになりました。全国のどんな地域にも魅力ある「食」があるにもかかわらず、住民がそのすばらしさに気づいていないことが少なくありません。こうした地域に根差した魅力的な「食」を地域活性化に生かすとともに、地域の一次産業も後押しする手立てを見出し、実践につなげていきたいと考えています。

研究とともに教育にも注力 学生の成長が嬉しい

社会のさまざまな事象を捉え、自分自身でその原因や意味を考える。自らの関心をトコトン追求できるのが、研究のおもしろいところです。一方で、研究と同じくらい情熱を注いでいるのが、教育です。実際に、現在課題だと考えていることを現場で解決していくのは、将来を担う学



生たちです。そのため、毎回の授業に工夫を重ねることはもちろん、150名を超える受講生一人ひとりにコミュニケーションペーパーで詳細なコメントを返信し、学生に応える授業づくりを心がけています。また教育の一環として、地域活性化のフィールドワークにも学生たちを参加させています。社会の人々と触れることが、学生の学びと成長につながっていきます。

研究者を志すか否かに関わりなく、学生には常に「たとえ教師の言うことでも『違うんじゃないか』と疑問を持ち、その答えを自分自身で探してほしい」と指導しています。初めて教鞭をとってから約20年が過ぎ、起業したり、社会で重要な地位や仕事に就いてがんばっている教え子の近況を知ると、自分のことのように嬉しく思います。

今後も教育とともに、日本の各地域の維持・発展に寄与する研究・実践を継続していくつもりです。こうした取り組みが目に見える成果を挙げるには長い時間を要します。長期的な視点で、持続可能な地域づくりに役立ちたいと考えています。

Profile

立命館大学経営学部卒業、同大学大学院博士課程前期課程修了、同大学大学院博士課程後期課程中退。2001年、経営学部専任講師に就任。その後、2010年、スポーツ健康科学部、2018年には食マネジメント学部に移籍。

映画・ドラマの 現場で経験した すべてが 脚本家としての 今に生きている

谷 慶子 映像学部 准教授

Profile

大阪芸術大学時代に脚本家を志す。卒業後、東映京都撮影に入所。スクリプターとして数々の映画・テレビドラマの制作に携わる。2003年、「タイ・ブレーカー」で第29回城戸賞に準入賞。以後、脚本家としても精力的に活動。2015年、立命館大学に赴任。脚本執筆を継続しながら教育にも尽力。



脚本家を目指しながら スクリプターとして活躍

美術関係の仕事をしていた父親の影響で、映画美術に関心を持ち、芸術大学に進学。そこで出会ったのが、映画の仕事の中でも「脚本」でした。3回生の時、課題で映画を制作した際に脚本を担当。教鞭を取っておられた映画監督で脚本家の中島貞夫先生から熱のこもった指導を受け、初めて長編脚本を執筆しました。それが学内のコンクールで脚本賞を受賞したことで芽生えたのが、「脚本を書くのって、おもしろいな」という思いです。「将来のことはわからない。でも好きなことを一生懸命やれば、何かにつながっていくんじゃないか」。そんな思いで脚本家を志しました。

「『現場』を勉強することが、脚本を書く上でも役に立つ」と中島先生に勧められ、卒業後は東映京都撮影所に入所。スクリプターとしてキャリアをスタートさせました。スクリプターとは、撮影現場で撮影するカットを記録・管理する役割のこと。撮影はシーン順、カット順には進みません。例えば前のカットでグラスに満杯だったビールが、次のカットで突然半分になっていたらつながりません。そうならないよう各カットの内容を記録し、整合性を保つよう撮影を管理するのが大きな役割です。撮影や編集などすべての制作工程を把握していなければ務まりません。その上、撮影が始まるとほとんど休みはなく、早朝から深夜、時には翌朝まで作業に追われることも多い過酷な仕事です。体力的にも精神的にも大変だったけれど、ドラマ作りを身を持って学ぶ日々は、本当に楽しいものでした。

1年がかりで執筆した脚本が 著名な賞に入賞

スクリプターとしてドラマ作りに携わって得た一番の財産は、俳優、映画監督、技術スタッフなど、「本物」といわれるプロとの出会いです。一流の人々の仕事ぶりや作品に対する姿勢を間近に見て、時には撮影の合間に話を聞く中で、制作のノウハウを知る以上に多くのことを学びました。

キャリアが5～6年経った頃からは、「このシーン、どう思う？」と監督などに意見を求められたり、脚本の修正を依頼されたりするようになりました。そうして目をかけてくださったプロデューサーの一人に勧められ、1年がかりで執筆したのが、「タイ・ブレーカー」と題した脚本です。それが新人脚本家の登竜門といわれる第29回「城戸賞」で準入賞したのを機に、脚本の依頼が増えていきました。

脚本家として大きな転機となったのは、2015年のこと。脚本の仕事が増えるにつれてスクリプターの仕事との両立が難しくなってきた矢先、立命館大学映像学部で教えるチャンスをいただいたのです。そこで思い切ってスクリプターの仕事を減らし、大学教員として学生に教えながら、脚本の執筆に力を注ぐことを決意しました。

脚本執筆とともに 学生への指導にもやりがい

現在は、映像学部で脚本や映画製作について指導しながら、映画やテレビドラマの脚本を手がけています。大学で脚本家を志してから、25年以上の月日が流れましたが、これま

での時間に無駄など一つありません。経験を積んだ分だけ、多くの共感を呼ぶ物語を書くことができていると思っています。またスクリプターとして通算280本近くの制作現場を経験し、脚本に書かれた言葉がどのように映像化されるのかを熟知していることも、今、大いに役に立っています。

また本学に赴任してからは、学生の指導にも新たなやりがいを感じるようになりました。これまで実践してきたことを言語化し、教えることを通して、私自身が理解を深めたり、新たに発見したりすることもあります。何より学生が指導の意図を理解し、脚本を書くおもしろさを感じてくれた時は、自分のことのように嬉しいです。

今後は脚本執筆を続けながら映画製作の現場を目指す若い人材を育てることに力を注ぎたいと考えています。一方、いつか自分の脚本で長編映画を監督するのも夢の一つです。

皆で力を合わせて映画やドラマを作る。そんな現場が大好きだから、寝る時間もないほど忙しくても夢中で打ち込み、力を磨いてすることができました。学生にも誰にも負けないくらい「好きだ」と思えるものを見つけてほしい。それがきっと将来につながっていくと信じています。



研究のおもしろさを実感し 実務家ではなく研究者の道へ

研究の楽しさを初めて知ったのは、大学3回生の時、所属していたマーケティングのゼミでグループ研究に取り組んだことでした。

着目したのは、インターネット上にある「クチコミ」です。当時大ヒットしていたアニメ映画についてのクチコミに、肯定的な内容ばかりでなく否定的なものも数多くあることを発見したのが発端でした。肯定的なクチコミが多ければ客足が伸びるというのは容易に想像できますが、否定的なクチコミが多いのにも関わらずヒットしているのはなぜなのか？



Profile

慶應義塾大学商学部を卒業後、2013年、同大学商学研究科修士課程、2016年、博士課程を修了。東洋大学経営学部を経て、2017年より現職。

そんな素朴な疑問からグループの仲間と調査を実施。それだけに留まらず、指導教授に勧められて英語で論文を作成し、国際学会でも発表しました。初めての研究を通じて、疑問や問題意識を元に仮説を立て、それを実証するプロセスや、学生ながら世界各国の研究者たちの前で発表し、「おもしろい」と評価を受けたことに大きな達成感と喜びを味わいました。

その後は就職するつもりで就職活動を行い、大手企業から内定を得たものの、「もう少し研究を続けたい」という気持ちが膨らみ、修士課程への進学を決意。加えて、ゼミに所属する大学院生の先輩を見て、「大学院で専門性を磨くことで進路の選択肢が広がり、キャ

リアが豊かになるかもしれない」と感じたことも、進学に気持ちが傾いた理由でした。

将来の進路について悩んだのは、博士課程への進学を決めた時です。修士課程修了後は就職するつもりで、この時も大手企業から内定を獲得しました。けれど長い目で自分の人生を考えた時、将来結婚や出産などのライフイベントを経ても仕事を続けるには、決められた勤務時間や会社のルールに縛られることなく自分の裁量で働き方をアレンジできる研究者の方が自分に向いていると思いました。

何より大きかったのは、学部時代から教える請う指導教授の存在です。学部生であつても妥協を許さず、厳しくも熱意を持って指導してくださり、何度も国際学会で発表するチャンスを与えてくださったおかげで、研究のおもしろさを実感することができました。教授の指導がなければ、現在の道は辿っていなかったと思います。

定説や常識を覆すような、 新たな知見を生み出すことが 研究の醍醐味

現在も消費者行動に対する「eクチコミ」の

影響について研究しています。博士論文では、インターネット上のポジティブなクチコミとネガティブなクチコミの比率が消費者行動に与える影響を探究しました。ある製品に対するネガティブなクチコミが消費者の製品評価にプラスの影響を与える逆説的な現象に着目し、どのような条件下でならネガティブなクチコミがマイナス評価を緩和するのかを調べました。その結果、とりわけ映画などの快楽的な商品の場合や、専門性の高い消費者がクチコミを書いた場合などでは、ポジティブなクチコミの中に一定の割合でネガティブなクチコミが混じていた方が製品評価にプラスに働くことが明らかになりました。

学術的な定説や一般に「当たり前」とされていることが必ずしも正しいとは限りません。消費者の心理や行動を観察し、既存の理論とは異なる事象や疑問点を発見した時こそが研究の出発点です。その問いに対する答えを実験や調査を通じて現実と照らし合わせながら、論理的に説明できる根拠を見出した時は、それまで苦しかったことがすべて報われるような気になります。研究者を志す若い学生にも、そうした研究の醍醐味を味わってほしいと思っています。

臆せずチャレンジをしつづける それが未来を切り拓く チャンスになる

立命館大学に赴任し、研究だけでなく教壇にも立つようになった今、自分自身の経験を踏まえ、学生に伝えているのは、「チャンスが与えられた時には、できない理由を探すのではなく、臆せず挑戦してほしい」ということです。チャンスは自分に都合の良いタイミングで巡ってくるわけではありません。私自身も、学生時代に指導教授から国際学会での発表をはじめとする数々の挑戦の機会を与えられました。中にはハードルの高いものもあったけれど、逃げずに全てに挑戦したことで得られた経験やそこでの出会いが実を結び、今につながっています。

今後もクチコミを介した消費者のコミュニケーションについて研究を続けていきます。またインターネット上だけでなく、人と人とのリアルなコミュニケーション、企業間の推奨行動やインフォーマルなコミュニケーションについても研究の裾野を広げたい。まだまだ研究意欲を燃やして、貪欲にチャレンジを続けたいです。

Case #05

「当たり前」に疑問を持つ それが研究の出発点

菊盛 真衣 経営学部 准教授

立命館大学 男女共同参画推進に伴う取組成果

立命館大学は、2016年度文部科学省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」に採択され、2018年度で中間年度となる事業3年目を迎えました。この3年間の事業成果をご報告致します。

1. 文部科学省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」事業の 中間評価でS評価（最高評価）を獲得

2016年度に採択された文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」の中間評価において、S（所期の計画を超えた取組が行われている）という結果を得ました。「目標達成度」「実施体制」の項目は、a（所期の計画と同等の取組

が行われている）という評価でしたが、「取組」「取組の成果」「今後の進め方」については、高く評価されました。今後は、「自然科学系の女性教員比率（有期雇用教員含む）の目標達成」、「学部長、研究科長に選任される女性研究リーダーの育成」が課題となります。

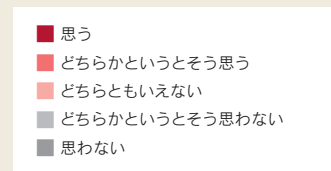
総合評価 S	目標達成度	取組	取組の成果	実施体制	今後の進め方
所期の計画を超えた取組が行われている	a	S	S	a	S

※国立研究開発法人科学技術振興機構HPより

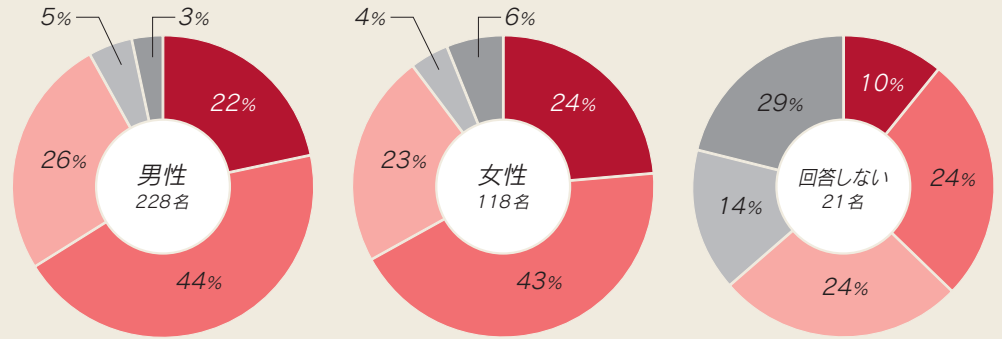
2. 2019年1月実施教職員対象「男女共同参画に関するアンケート」結果のご報告

教員367名、職員216名の皆様にはアンケートにご協力いただきまして、ありがとうございました。結果につきましては、ホームページにて公表させていただいております。ご回答いただいた内容を真摯に受け止め、よりよい研究環境づくりを目指していきます。

Q. 本事業に採択されたことに伴い、
本大学の男女共同参画が
推進されたと思いますか。



※教員367名アンケート結果より



松原 洋子

副総長・副学長／研究・学術情報・国際連携・ダイバーシティ&インクルージョン担当



昨年度まではリサーチライフサポート室の運営委員という立場で、先端総合学術研究科の教員として関わって参りました。2019年度からは、担当副学長として参加しております。

文部科学省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型）」事業を進めるにあたり、リサーチライフサポート室が直近の目標として取り組んでいるのは、主に自然科学および科学技術を専門とする女性研究者の『採用、登用と支援』です。

吉田美喜夫前総長、田中弘美前副学長のリーダーシップのもとで、今回の中間評価では最高評価を得ました。課題として指摘された「学部長、研究科長に選任される女性研究リーダーの育成」についても、2019年度、女性学部長（理事）が2名誕生し着実に前進しています。事業終了までの今後3年間、事業のさらなる発展に努めます。

性別役割分担という近代社会の規範は、研究の創造性を阻害するものではないかもしれませんが、今なお影を落としています。女性研究者支援を入り口に、隠れていた障壁をひとつひとつ見つけ出し、取り除いていくことが、リサーチ

ライフサポート室の目標であると考えます。近年では、国際社会における学術分野において、特にSDGs※のジェンダー平等が非常に重要となっています。リサーチライフサポート室の活動に参画する一員として、事業をSDGsを推進する学園全体の政策につなぐことが、担当副学長としての私の役割となります。

2030年に向けた立命館の学園ビジョンR2030の達成目標のひとつは、「ダイバーシティ&インクルージョンを実現する学園」です。ダイバーシティ&インクルージョンとは、誰もが潜在的にある能力を発揮し、挑戦できる場をつくることです。立命館大学が年齢、障がいの有無、国籍等にかかわらず、多様な性を生きる人々が活躍できる場となるよう、取り組みを進めて参ります。今後ともご協力とご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

※ Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標



篠田 博之

情報理工学部 教授／リサーチライフサポート室 新室長



2019年度に新しい体制となり、室長に就任いたしました。昨年度までは研究部長として、副室長という立場で関わって参りました。

事業が開始された2016年度以降、総長・学長のリーダーシップの下、15名の学部長理事（2018年度当時）を介して全学部が連携する実施体制を構築するとともに、スピード感のある合意形成により積極的に事業を進め、総合的に展開しました。その結果、事業の中間評価では最高評価となる「S評価」を獲得しました。

本事業の中間評価に伴い、2019年1月には本大学教職員を対象として、男女共同参画に対する認識や効果について確認することと、次年度以降の活動方針に反映させることを目的に、アンケート調査を実施しました。

中間評価では「S評価」を得ましたが、一方で急速な展開の後には、大きなゆり戻しがあると実感しております。女性限定公募・前倒し人事は、応募を躊躇する層の後押しの機会となり、自然科学系無期（テニユア）教員比率向上につながりましたが、実施後のフォローとして、学部・研究科へのヒアリングが必要と捉えております。また、教職員の皆様からいただいたアンケート結果の分析を通して、学内における当室の認知度の低さ、「仕事と家庭との両立支援」

に関する制度の利便性や会議等の運営方法の改善といった課題があると認識しております。

本事業では自然科学系の女性研究者の活躍の場を引き続き強めていくと共に、性別や年齢・国籍・専門分野に関わらず、本大学に所属する新任教員や、学童期のお子さんがいたり、介護に携わっている教職員へのサポートも必要だと考えております。

こうした背景をもとに、本大学に事業が定着されることを目指し、主体的に役割を担っていただける先生方に当室の運営委員になっていただきました。立命館大学の中には、様々なユニークな素晴らしい取り組みがあります。その取り組みを推進している各部署より運営委員にご就任いただいたことにより、立命館らしいダイバーシティ事業が成し得るという体制になりました。

2019年度は本事業の4年目を迎え、中間評価やアンケートにおいて今後の課題となった取組に重点を置き、学内関係部署との連携を強化しながら、各種施策を継続して参ります。単なる数値目標の達成を目指すものではなく、質的な面での充実も図ります。

今後ともご協力賜りますようよろしくお願い申し上げます。